3歳児 ＜ 知 Ⅰ期・5月 創造 ＞

にょろにょろって。にょろにょろ！

～絵本を通して、表現することを楽しむ～

＜これまでの取組＞

４月当初は不安を抱きながら登園していた子どももいたが、指導者との信頼関係を築く中で、安心して登園するようになってきた。園生活の中では、いろいろな歌や絵本に触れながら、指導者と一緒に手遊びをしたり、音楽に合わせて踊ったり歌ったりして体を動かすことを楽しんできた。

園生活に慣れてきた５月、一人の子どもが動物になりきって手紙を取りに来た。それが徐々にクラス全体へと広まり、動物の真似をして手紙を取りにくる姿が見られるようになってきた。このように、それぞれの表現を楽しんできた子どもたちは、日を重ねるごとに友達の動きにも興味をもち始めているようだった。

また、これまで様々な絵本を楽しんできたが、読んでほしい絵本を指導者に持ってきたり、絵本に登場する人や物の動きに興味をもって気付いたことを話したり、絵本の時間を楽しみにしている姿も見られた。

＜本活動のねらい＞

・絵本の中で大好きなところを見つけたり、面白さを感じたりする。
・指導者や友達と一緒に動物になりきって表現することを楽しむ。

＜本活動での教育的意図＞

・動物になりきりながら、橋を渡って遊ぶ楽しさを味わえるようにする。
・安心して自分の表現や思いを出せるようにする。
・指導者や友達と一緒に、体を動かすことを楽しめるようにする。

子どもと指導者の姿　指 - 指導者　子 - 子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○絵本『いっぽんばしわたる』を見る。 ○翌日 指　保育室にウレタン積み木を並べておく。 A　児　走って渡ったり、歩いて渡ったりを何度も繰り返す。 B　児「橋や！」　健康な心と体等 子　登園し、身支度を終わらせると、ウレタン積み木を渡って行く。　健康な心と体、豊かな感性と表現等 C　児『いっぽんばしわたる』の絵本を手にし、ずっと見ていたが、その絵本を指導者に渡す。 指「いろんな動物が橋を渡ってるね」	知同じ言葉が繰り返されている絵本を読み、言葉のリズムの面白さを感じられるようにする。 体興味を抱いた絵本の登場物と合うような遊具を置いておき、体を動かしたくなる環境を整える。 知絵本に興味をもって見ている子どもの思いを受け止め、その思いを共有する。 知友達と一緒に、引き続き体を動かして表現する楽しさを感じられる

	ように場を広げる。
指 床にビニールテープで大きなコの字を引いておき、その線の延長線にウレタン積み木を置いておく。	体いろいろな体の動きを楽しめるように、道具の置き方を工夫し環境を整える。
指 「さっき、橋を渡っていた友達がいたね。そう言えば、この絵本、さっきCくんが持って来てくれたけど、この絵本の中にもたくさんの動物が橋を渡ってたね」と言いながら動物の絵を見せる。	
子 ♪いっぽんばし渡る　いっぽんばし渡る～と歌いながら、ビニールテープの上を歩き、ウレタン積み木の上に登ったり降りたりしながら進んで行く。	知絵本に出てくるフレーズをリズムにのせて歌いながら誘いかけ、指導者や友達と一緒に体で表現する楽しさが感じられるようにする。
指 「落ちないようにっと」	
D 児 「Dちゃんウサギ！」と言って立ち上がり、手を上にあげ跳ねながら橋を渡っていく。 健康な心と体、豊かな感性と表現等	
指 「ウサギがやってきた！」D児の真似をする。	知一人ひとりの表現を受け止めて認め、安心して表現できるようにする。
子 後ろに並び、列になって橋をウサギで渡っていく。 豊かな感性と表現等	
E 児 床をはい、進んでいく。	
指 「あ、Eくんヘビも渡るのかな」	知子どもたちの表現を繰り返して他児に知らせ、表現したい気持ちを膨らませる。
子 ヘビをしているE児を見て、床をはって進んでいく。 豊かな感性と表現等	
D 児 「先生、次クマやで！ほら！」と言って四つばいになる。	
指 「クマも橋から落ちないように渡っているね」	徳友達の表現に気付くように声をかけ、共有する喜びを感じられるようにする。
子 それぞれがなりたい動物に変身して橋を渡っている。 思考力の芽生え等	
E 児 飼育をしていたアオムシを見に行き、「あ！アオムシ」と言う。	
指 「アオムシ歩いてる？」	知・徳身近な生き物の動きを見て、その動きに興味をもったり、真似たりして楽しんでいる姿を認める。
E 児 「うん！にょろにょろって。にょろにょろ！あはは！」と言いながら、体をくねくねさせ橋の方へ進んで行く。 豊かな感性と表現等	
○何度も繰り返し遊んでいるうちに、進行方向から進んで来る友達にぶつかる場面が見られた。	
指 「（ウレタン積み木の端の方にしゃがんで）橋を渡る方はこちらで切符を渡してから渡ってくださいね」	体室内で安全に遊べるように言葉がけをしたり、環境を整えたりする。
子 「はーい！」と返事をして、タッチしてから何度も繰り返し渡る。	徳安全な遊び方をイメージできるように、普段から遊んでいるもの（切符）を伝えることで、ルールを分かりやすく知らせ、安心して遊べるようにする。
F 児 （列を作って並んでいたがG児が前から来るのを見て）「そっち違う。こっちからやで」と後ろを指さす。 道徳性・規範意識の芽生え等	
G 児 後ろに並びに行く。	

指 「FくんもGくんも、よく気が付いたね」 ○その後も、ウレタン積み木の並べ方を変えたり、動物を変えたりしながら橋を渡り続けていた。	徳・体 安全な遊び方について子どもが気付いたことを認め、他の子どもたちにもその気付きを言葉にして知らせることで、ルールを守って遊ぶ気持ちよさを感じられるようにする。

【考察】

・絵本の中に出てきた場面と似たような環境を実際につくることで、絵本で見た場面を思い出しながら、いろいろな動物が橋を渡る姿をイメージし、表現することを楽しんでいた。また、指導者が橋を渡る時に口ずさんだ歌のメロディが心地よく、子どもたちもすぐに歌うことができ、「落ちないように」というスリルと「渡りきる」という喜びを感じることができたと考える。

（思考力の芽生え、豊かな感性と表現等）

・子ども自身が興味を抱いている生き物の動きを見て、その動きを表現遊びの中に取り入れている姿も見られた。子ども一人ひとりが絵本の好きな場面で、何に魅力を感じたかを指導者が察し、環境を整えていくことで、子ども自らが体を動かし表現したいという思いを抱くのではないかと考える。

（思考力の芽生え、豊かな感性と表現、自然との関わり・生命尊重等）

・動物になりきって橋を渡ることで、跳んだり、はったり、歩いたり、しゃがんで進んだりと、室内でいろいろな動きを楽しんでいた。少し段のある遊具を登ったり降りたりすることで落ちないように渡っていた子どもたちだが、進行方向から友達が来ると落ちそうになったり、ぶつかったりする姿が見られた。安全な環境のイメージができるように伝えたことは、気持ちよく遊べることに気付くきっかけとなったのではないかと思う。 **（健康な心と体、道徳性・規範意識の芽生え等）**

今後に向けて

・動物になって橋を渡ることをきっかけに、いろいろな動きを楽しんだり、友達の表現を見たり真似をしたりして、イメージを広げて遊ぶ楽しさを感じ、様々な表現を楽しめるようにしていきたい。

『いっぽんばしわたる』　作：五味太郎　（絵本館）

3歳児 ＜ 体 Ⅰ期・5月 運動 ＞

おでかけ、楽しかったね

～フープの遊びを楽しみ、体を動かす心地よさを感じる～

＜これまでの取組＞

４月から新しい環境になり、異年齢児に関わってもらうことで少しずつ園生活にも慣れてきている。好きな遊びを見つけて楽しむ姿も見られるようになっている。園庭でフープを使って遊んでいる異年齢児の様子に興味をもち、そばでじっと見ていることもあった。

＜本活動のねらい＞

指導者や友達と一緒に、フープでいろいろな遊びを楽しむ。

＜本活動での教育的意図＞

・フープの遊びに興味や関心がもてるようにする。
・フープを使っていろいろな遊びを楽しみ、体を動かす楽しさを感じられるようにする。

子どもと指導者の姿　指 - 指導者　子 - 子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○フープを人数分準備しておく。 子　フープを触ったり、くぐったりして遊び始める。 A・B児　フープの中に入り、電車ごっこを始める。 社会生活との関わり、健康な心と体等 指　「おもしろそう、電車に乗っておでかけしようか」と言いながら、フープの電車に乗ってリズム室に移動する。 指　「電車がリズム室に着いたよ」 「この電車、いろいろなものに変身させて遊ぼうか」 A　児　フープをこまのように回転させて遊ぶ。 指　「Aちゃんのフープ、クルクル回っているね。どうやって回したの？」 A　児　「こうやって、手でくるりってするの」 指　「先生もやってみよう」と言いながらA児と一緒にフープを回す。 「A ちゃんの真似っこしたら、クルクル回った。楽しいね」 子　フープを回し始める。 B　児　「先生見て！」フープに乗ってピョンピョン跳ねる。 指　「フープに乗ったらピョンピョン跳ねるね。おもしろいこと見つけたね」	徳　指導者が誘いかけることで、子どもが安心して遊びを楽しめるようにする。 体　子どもの考えた遊びを大切にし、継続させながら、広い場所に移動できるように、指導者が誘いかけることで、十分に体を動かすことを楽しめるようにする。 知　A 児の遊び方をみんなの前で見せるようにすることで、他児も友達の遊びを知り、好奇心がもてるようにする。 知　考えたことをタイミングよく認め、指導者も一緒にすることで、他

子　B児の姿を見て、フープに乗ってピョンピョン跳ねて遊び始める。 B　児「おでかけしてくる」 指　「いってらっしゃーい!!」 C　児「ブーン」と言ってフープをハンドルのように回して走る。 指　「Dちゃん、何に乗ってるの？」 D　児「車！」 子　「私も」「ぼくも」 指　「先生も車に乗ってみよう。ドライブ楽しいね。どこに行こうかな？」 D　児「(少し離れたところを指さしながら）あっちの公園！」 子　「行こう、行こう！」 D　児「出発!!」 子　「ブーン」と言ってリズム室を１周する。 D　児「次は、お店屋さん」 指　「お店屋さんまではガタガタ、くねくねした道を通って行くけど、運転大丈夫かな？」 子　「大丈夫!!」 指　進む速さを変えたり、体を上下させたりしながら移動し、「楽しかったね。そろそろお部屋に帰ろう」と言葉をかける。 D　児「電車に乗って帰る！」 E　児「車がいい」　自立心、思考力の芽生え等 指　「好きな乗り物に乗って帰ろう!!」	児への刺激となり、遊びへの意欲をもてるようにする。 体フープを使った遊びを考えたり、試したりすることを通して、体を動かす心地よさが感じられるようにする。 体子どもが体を動かすことを楽しめるように、動きに合わせて言葉をかけ、広い場所で存分に遊べるようにする。 体指導者が積極的に遊ぶことで、遊びに弾みがつき、他児も一緒に楽しもうとして、みんなで遊ぶ楽しさが味わえるようにする。 体指導者が一緒に遊びながら、変化のある動きを見せることで、体の部位を同じように使って楽しく体を動かせるようにする。 体指導者が子ども一人ひとりの思いを受け止め認めることで、満足感や充実感がもてるようにする。

【考察】

・フープを手に取りやすい所に置いておくことで、子どもが主体的に遊ぶ姿が見られるようになった。フープの丸い形から、いろいろなものが連想でき、回したり、中に入ったり、中に入って動くなど、具体的なイメージをもって遊ぶ姿につながったと思われる。指導者が一人ひとりの遊びに気付き遊んだことで、フープを使って多様な遊びを一緒に楽しむことができた。

（健康な心と体、思考力の芽生え、豊かな感性と表現等）

今後に向けて

・友達と一緒に遊びながらイメージを共有し、ごっこ遊びに発展したり、フープの大きさを変えることで、挑戦する、競争するという遊びにつなげたりして運動機能の発達にもつなげていきたい。

3歳児 ＜ 知 Ⅱ期・6月 思考 創造 ＞

“のんちゃん”もいっしょにいこう

～身近な自然に興味や関心をもち、収穫をしたり、ごちそうをつくったりする～

＜これまでの取組＞

５月中旬、子どもがカタツムリを持って来た。子どもたちと落ち葉を集めて、飼育できる環境をつくった。絵本「かたつむりののんちゃん」を読み聞かせたことから、さらにカタツムリに親しみをもち、“のんちゃん”と名付けた。“のんちゃん”に、「おはよう」と声をかけたり、手に乗せて動く様子を観察したりして親しみが増していった。

６月、歌『かたつむり』を子どもたちに知らせた後、「みんなで“のんちゃん”になって、お散歩に行こう！」と声をかけた。すると、体を丸める、いろいろな場所に隠れる、見つけ合うなど、カタツムリの様子を体で表現するようになってきた。その後「“のんちゃん”をつくろう」と声をかけ、色紙を用意すると、指導者と一緒に折ったり模様をかいたりして、カタツムリの“のんちゃん”づくりが広がった。台紙や棒を付けると、自分の“のんちゃん”を喜んで動かす子どもが増えてきた。

＜本活動のねらい＞

・つくったカタツムリを持って散歩に行くことを喜び、畑の自然物に興味や関心をもって、見たり触れたりする。
・収穫の喜びを感じ身近な素材を使って、収穫した野菜や果物、お弁当のおかずなどをつくる。

＜本活動での教育的意図＞

・自分でつくったカタツムリを持って気持ちを弾ませて散歩をすることで、畑の様子を見たりカタツムリを触ったりして、身近な自然物に興味や関心をもてるようにする。
・畑に実っている野菜や果物を見つけたり、収穫したりした経験から、身近な素材を使って収穫物やお弁当のおかずなどをつくる、見立てて遊ぶなど、自分なりの方法で思いを表現できるようにする。

子どもと指導者の姿　指 - 指導者　子 - 子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○A児とB児は“のんちゃん（台紙や棒付きの自分がつくったカタツムリ）”を持ち、「かわいい」と見合って笑っている。しばらくすると２人は、保育室の出入口へ行き、“のんちゃん”を動かしている。 指「のんちゃん、いろいろなところへ行けて嬉しそうね」 A 児「のんちゃんと、お散歩してくる」 A 児“のんちゃん”を持ち、かがみながら廊下に出て行く。 B 児ままごと遊び用のかばんに野菜の形をしたおもちゃを詰める。 指「のんちゃんのご飯かな？お野菜大好きだもんね」 B 児嬉しそうにうなずき、“のんちゃん”に食べさせる。	 徳つくったものを大切にする気持ちが育つように“のんちゃん”に思いを寄せている姿に共感する。
道徳性・規範意識の芽生え、豊かな感性と表現等 指「みんな、優しいね。のんちゃん喜んでいるよ。そうだ、今からお庭に、のんちゃんを連れて行ってあげようか？」 子「うん」「のんちゃんも、一緒に行こうな」 ♪でーんでんむーしむし～と歌いながら、畑に到着する。到着するなり“のんちゃん”を畝の上や栽培物の近くで動かし、「葉っぱいっぱいあるよー」と話しかけている。	知・徳楽しみながら園庭や畑を散策できるように自分でつくった愛着のあるものを持って畑に行くことを提案する。

自然との関わり・生命尊重、道徳性・規範意識の芽生え等 C　児 “のんちゃん”をゴーヤの前で動かしているうちに、葉にとまっている小さな虫を見つけ、「虫いてる！」と大声で言う。 指 「本当！虫さん、小さいのによく見つけたね。のんちゃんと一緒に見つけたね。何の葉っぱにとまってるのかなぁ？」 D　児「これなに？」 近くにいた5歳児「教えてあげようか？ゴーヤやで！」 子 「知ってる」「食べたことあるでー」「知らーん」と口々に言う。 指 「お兄ちゃん、よく知ってるね。ゴーヤの葉っぱはこんな形なんだねぇ」 子 葉っぱを見たり、触ったりする。	知・徳自然や栽培物に興味や関心をもてるように子どもの発見した喜びに共感したり、他の年齢の子どもに親しみや憧れの気持ちがもてるようにやり取りができるような言葉をかけたりする。 知名前を知らせるとともに、色や形、手触りなどに気付くように言葉をかける。
言葉による伝え合い、思考力の芽生え等 A　児「あ！見つけたー」と“のんちゃん”を持って別の畝へ行き、小さなナスを指さす。	
道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え等 指 「よく見つけたね。野菜のあかちゃんができてるよ」 子 「見せてー」「ちっちゃい」「かわいい」	徳見つけたことを十分に認め、他児にも広める。
自然との関わり・生命尊重等 指 「野菜のあかちゃん、落ちると大きくなれないね。お花が咲いてるよ。きれいな色ね」 A　児「紫！」 指 「紫色のお花ね。前にもこのお野菜見たね・・」 A　児少し考えた後、「ナス」と答える。 指 「そうやね、ナスやね。Aちゃん、よく覚えていたね」 子 「ナスやねー」「ナスやねー」 指 「今日は、のんちゃんと一緒に畑で虫や野菜のあかちゃん見つけたね。また見つけたら先生やお友達に教えてね」	知野菜の生長に気付いたり、大切にしたりしようとする気持ちがもてるように声をかける。 知気付いたことを喜んで伝えられるように、体験を振り返ったり、その子どもなりに気付いたことを認め、同じ言葉で繰り返したりする。
○翌日からも子どもたちは、「いってきまーす」と“のんちゃん”と畑へ行き、「あった！」と実りに気付いたり、畝や野菜の葉の上をはわせたりしている。 言葉による伝え合い等	
○数日後、指導者が一人ひとりにかごを渡す。子どもたちは、「お買い物！」と喜び、指導者と畑に行く。 子 「先生、キュウリあるよ！」 「トマトできてる」「赤いトマト」と、大きな声で知らせる。 指 保育室で、収穫した野菜を一人ずつ見せ合う機会を設ける。 C　児「キュウリ！チクチク・・」 指 「本当やね。ナスは・・？」 E　児「ツルツル」ナスを触って言う。	徳一人ひとりが収穫の喜びを味わえるように、人数分のかごを用意する。 知いろいろな野菜の名前や大きさや感触などの特徴に興味がもてるように、自分で収穫した野菜を見せ合う機会をつくる。

事例20　3歳児

F　児「ぼくはピーマン採った」 思考力の芽生え　自然との関わり・生命尊重等 ○以降、毎日のように、指導者と買い物かごを持って畑に行く。６月後半からは、ピーマン、ゴーヤ、エダマメ、オクラ、カボチャなども収穫でき、買い物かごがいっぱいになる日もあった。 ○７月初旬、赤や緑、ピンク等の紙や素材を保育室に用意しておく。 指　手で丸めて見せる。 子　興味をもち丸め出す。「トマト！」「えっと、ピーマン！」「モモつくった」などと、今まで園内で収穫した野菜や果物の名前を言う。豊かな感性と表現、思考力の芽生え等 指　小さく切った波段ボールを巻いて置いておく。 子　「タマゴ焼き」「これ、お肉！」「お弁当やねん」と言いながらつくる。 指　「おいしいものいっぱいつくったね。畑で見つけてくれたお野菜やモモもあるし、お弁当のおかずもあるし・・ごちそういっぱいね」 子　「おにぎりもほしい」「私はもっとモモつくりたい！」「食べてー」と言いながら４・５歳児のところに持って行く。豊かな感性と表現等 指　ままごとの皿や盆、小かごを用意する。 子　「いただきまーす！」と制作物を乗せたり入れたりして食べる真似をする。社会生活との関わり等 ○つくったごちそうが、日に日に増えていく。	 知つくることを楽しめるように、扱いやすくイメージに合うような素材を用意し、指導者が丸めて見せたり、自分なりに工夫してつくる様子を認めたりする。 知・体丸める、巻く、ちぎるなど見立てて遊ぶことが楽しめるように環境を整え、一人ひとりの表現を認め、意欲を引き出す。 徳子どもの言動から興味があることを把握し、友達と関わることが楽しくなるように、遊具等をタイミングよく用意する。

【考察】

・「“のんちゃん”をお庭に連れて行こう」と誘ったことで、散歩に行くことが嬉しくなり、無理なく身近な自然に関わることができた。「“のんちゃん”に、いろいろなところを見せてあげたい」という思いが、小さな虫や野菜を発見する活動につながった。

（道徳性・規範意識の芽生え、自然との関わり・生命尊重等）

・ゴーヤやナスなどを子どもが見つけた機会をとらえ、栽培物の名前や形、大きさなどに気付くように指導者が働きかけたことで、葉の形や手触り、花の色、実の大きさなどに興味や関心をもった。そして、活動を楽しむうちに、物の名称を知ったり、「キュウリはチクチク」と気付いたり、感じたりしたことを自分なりの言葉で伝えることを楽しんでいた。

（言葉による伝え合い、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重等）

・個人用かごを用意したことで、一人ひとりが自分で収穫する喜びを味わうことができた。年齢やそれぞれの子どもの実態を十分把握し、思いを受け止めていくことが大切である。興味をもっていることを自分なりに実現できるように、扱いやすくイメージに合うような素材を用意したことで、つくったり、見立てたりすることが楽しく、友達と関わって遊ぶことにもつながった。

（社会生活との関わり、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、豊かな感性と表現等）

今後に向けて

・興味のある遊びから、身の回りの事物・事象への気付きや発見を受け止めていきたい。また、実体験から新しい活動への興味や関心の幅を広げていきたい。

3歳児 ＜ 体 Ⅲ期・9月 運動 ＞

先生、見て！できた!!

～やってみようという気持ちをもって、体を動かすことを楽しむ～

＜これまでの取組＞

体を動かす楽しさを味わえるように、いろいろな運動遊びに取り組んできた。子どもたちの中には、体を動かして意欲的に遊ぶ子どももいるが、中には、自分から入ろうとしなかったり、怖がったりする子どももいる。子どもが進んで体を動かして遊ぶことを楽しめるように環境を整えたり、遊びを工夫したりして取り組んできた。

＜本活動のねらい＞

・体を動かして遊ぶことを楽しむ。
・頑張って「できた」という経験を通して、満足感を味わう。

＜本活動での教育的意図＞

・友達と関わって遊ぶ中で、体を動かして遊ぶ楽しさを感じられるようにする。
・運動遊びを通して、意欲的に取り組もうとする気持ちを育む。

子どもと指導者の姿　指 - 指導者　子 - 子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○指導者が、マットで山を作り、フープを並べる。 子　マットの山を登り下りしたり、フープでケンパをしたりして遊んでいる。 A児　マットの近くに行って、友達の様子を見ている。 指　「Aちゃんもやってみる？」 A児　「怖いよ～」 指　「Aちゃん、座って足から下りてみてー。ゆっくり下りたら大丈夫だよ」 A児　「怖いよ～」 指　「じゃぁ、Aちゃん、一緒にしてみようか？」とA児に両手を差し出す。 A児　指導者の手を持って、マットの山をゆっくり登り下りしてみる。　健康な心と体、自立心等 指　「できたね！やったー！」 A児　少し笑っている。 指　「Aちゃん、もう1回してみようか？」 A児　「うん」と言って、指導者の手を持って、登って下りる。「できた！」　健康な心と体、自立心等	体　体を動かして遊ぶ楽しさを味わえるように、日頃から親しんで遊んでいるマットやフープを使って環境を整える。 知　体の動かし方を分かりやすい言葉に置き換えることで、理解しやすいようにする。 徳　マットの山を下りることができたという経験をすることで、不安感が軽減し満足感や達成感を感じられるようにする。

○翌日 指　前日と同じ高さの山と、少し低めの山の２つを用意する。 Ａ児　マットの山を前に立ちすくんでいる。 指　「大丈夫、できるよ。こっちの山でやってみる？」と低い山ですることをすすめ、Ａ児のことを見守る。 Ａ児　指導者や友達を見た後、自分で低い方の山に登り、ゆっくり下りる。　健康な心と体、自立心、思考力の芽生え等 Ａ児　「下りれた～！」 指　「自分で下りられたね！」 子　「Ａちゃん、できたね～！」 Ａ児　何度も低い山を自分で登り下りしていた。	体　少し頑張ったらできるという目標がもてるように高い山、低い山の２つを用意し、自分で選んでできるような環境を整える。 徳　指導者の援助で、マットの山を下りることができたという経験を振り返ることで、自分でもしてみようという意欲を引き出す。 徳　少し頑張ったらできたという達成感を認め共感する。
○翌々日 指　前日と同じようにマットとフープを用意する。 Ａ児　友達と一緒に、マットやフープで遊んでいる。 「先生、見て！できた！！」と言いながら、自分でマットの山を何度も登ったり下りたりしている。 子　「Ａちゃん、自分でできるようになったで～」 指　「すごいね、自分で下りられるようになったね」 健康な心と体、自立心、協同性等	徳　友達と一緒に遊ぶ楽しさが感じられるように環境を整える。 徳　毎日同じ環境にすることで子どもが安心し、何回も挑戦しようとする意欲がもてるようにする。 徳　自分でしようとする意識が育まれるように、「できた」という喜びに指導者が共感し認めていく。

【考察】

・子どもたちが「やってみたい」と思う活動や遊びを取り上げたが、一人ひとりの興味やできることは違うので、同じ活動でもそれぞれに合わせた援助の仕方や、声かけを工夫することが必要だと感じた。指導者も一緒に動きながら、必要な援助や助言をすることで、子ども自身が「できた」「やってみよう」という自信や意欲をもつことにつながった。

（健康な心と体、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等）

・少し頑張ったらできるであろう目標がもてるように活動を取り入れたことは、Ａ児が自ら「低い山を選んでやってみよう」「やってみたらできた」という達成感や喜びになっている。このことが、自己肯定感につながっていると思われる。また、毎日同じ環境での遊びを保障することで安心し、何度でも挑戦しようとする気持ち（意欲）が育まれたと感じる。

（健康な心と体、自立心等）

・今回は、指導者から誘いかけたが、すぐに活動に参加しなくても、友達の様子をじっと見ている姿を認め、タイミングを見ながら背中を押すことも必要だと考える。　**（自立心等）**

今後に向けて

・継続した活動に少しずつ変化を取り入れることで、子どもが無理なく楽しみながら、意欲をもち活動に取り組めるようにしていきたい。

3歳児 ＜ 徳 Ⅲ期・10月 規範意識 ＞

駅に来たら、代わってね

～友達と遊具で遊ぶ中で、順番や交代することを知る～

＜これまでの取組＞

いろいろな活動に興味があり、何でもやりたいという気持ちをもつ子どもが多く、「自分がやりたい！自分が先に！」と強く自己主張するところもある。

順番を待つことや交代する場面では、オモチャや場所を取り合う姿がしばしば見られる。所庭では、２台しかない２人乗りの三輪車に乗りたい子どもが、三輪車を取り合ったり、代わってほしい気持ちを友達に伝えられなかったりすることがよく見られ、その都度、指導者が仲立ちとなり、共同の遊具の使い方を工夫しながら気付かせるようにしてきた。

＜本活動のねらい＞

・順番や交代などの約束・ルールを守ることで、気持ちよく遊べることを知る。

＜本活動での教育的意図＞

・一人ひとりの気持ちを受け止めながら遊ぶ中で、順番や交代など約束・ルールを守ることの大切さを知らせていく。

子どもと指導者の姿　指 - 指導者　子 - 子ども 幼児期の終わりまでに育って欲しい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○２人乗りの三輪車をめがけて、A児とB児が所庭に飛び出して行った。A児が先に三輪車をつかんだが、B児も無言で三輪車を持ったまま離そうとしない。 A　児「Aが先やった！」 指「どうしたの？」 A　児「Aが先やったのに、Bちゃんが三輪車に乗った」 指「Bちゃんも、三輪車に乗りたいんやね」 B　児うなずく。 指「BちゃんもAちゃんも乗りたいんやね。どうしたらいいかな・・・」 A・B児黙っている。 指「AちゃんとBちゃん交代で乗ったらどうかなあ？」 A・B児うなずく。 指「じゃあ、Aちゃんが先に乗って、後でBちゃんに代わってもらったらどうかな。Bちゃんは、後で貸してって言おうね」	徳それぞれの遊びたい気持ちを受け止めて、まず、子どもが安心感をもつことができるようにする。 知自分の思いや考えを自分なりの表現で伝えられるよう仲立ちをしていく。 徳自分の気持ちをなかなか言葉にできないB児にＡ児の思いを伝えたり、相手にどう伝えたらよいのかを具体的に知らせたりして、思いを代弁することで他者との関わり方を知らせていく。 知自分で考える力が育まれるよう、保育者が具体的な方法を提示しながら進めていく。

A・B児 うなずく。 協同性、道徳性・規範意識の芽生え等	
B　児 「あとで、貸して」と指導者に促されて、言うことができ、指導者と一緒に、A児に交代してもらうまで待つことになった。 協同性、道徳性・規範意識の芽生え等	知 相手に伝えるための適切な言葉を知らせる。
指 「我慢できて、えらかったね。先生と一緒に待っていようね」	徳 指導者が仲立ちとなって、子ども同士の関わりの中でルールをつくったり、守ったりできるようにしていく。
A　児 しばらく乗った後、「あとで、代わってな」とB児に三輪車を渡した。 道徳性・規範意識の芽生え、言葉による伝え合い等	徳 約束が守れた（自分の気持ちをコントロールできた）ことを受け止め、認めることで、自分から約束・ルールを守ろうとする気持ちがもてるようにしていく。A児には交代できたことを認めて、約束・ルールを守ってよかったという気持ちがもてるようにする。
指 「Aちゃん、えらかったね。ちゃんと交代できたね」	
B　児 嬉しそうに三輪車に乗っているが、しばらくたっても一向に代わる気配がなく、指導者が声をかけても知らん顔をしている。	
A　児 「先生、Bちゃんいっぱい乗ってんのに代わってくれへん」	
指 地面に円をかき、そのそばにベンチを置き、B児に「ここは、駅でーす！一周してきたら、ここで代わってくださーい！」と言葉をかける。	知 印を付けたりベンチを置いたりして駅をつくり、交代のタイミングが目で見て分かるようにする。
C　児 もう１台の三輪車に乗っていたが、指導者の言葉を聞き一周回って駅のところに来て交代する。 道徳性・規範意識の芽生え、協同性等	徳 駅に見立てることで、楽しみながら交代できるようにし、「交代する」という約束・ルールを具体的に知らせる。
B　児 C児が交代している姿を見ていた。そして、駅まで来ると、三輪車から降りた。	
指 「Bちゃん、上手に交代できたね。駅で待ってたら、また、三輪車に乗れるよ」	徳 交代できたことを認めて、自然に約束・ルールを守って遊べるように誘導し、順番に乗ることで、みんなが楽しめることに気付かせていく。
B　児 うなずく。	
指 子どもの様子を見ながら、約束やルールが定着するまで、「ストップ！」「交代でーす！」と言葉をかけるようにした。	徳 友達と楽しさを共感できるように指導者が仲立ちとなり、一緒に遊ぶことを楽しいと思う気持ちを育んでいく。
○他の子どももたくさん集まり列になって並んでいたが、順番に一周ずつして交代している。B児も笑顔で交代している。そのうち子ども同士で誘い合い、２人乗りの前後で役割を分担しながら三輪車に乗る姿も見られ、お互いが譲り合いながら遊ぶ姿が見られる。 健康な心と体、協同性、道徳性・規範意識の芽生え等	
指 「三輪車に順番に乗ったり貸してあげたりして、みんながルールを守ったから、楽しく遊べてよかったね。また、みんなで一緒に遊ぼうね」	徳 約束・ルールを守り楽しく活動できたことを認め、自分から約束・ルールを守ろうとする態度につなげていく。

【考察】

・３歳児のこの時期は、言葉で「順番よ」「交代しよう」と言われても、なかなか理解できないことが多い。特にＢ児にとっては「あとで」という曖昧な言葉では交代するタイミングが分かりにくかったようである。交代を分かりやすく『駅』という目に見えるものにすることで、「交代する」ことが理解できた。始めは指導者の投げかけや支援によって交代していたが、「交代する」ことがだんだん分かってくると、自分たちだけで交代しながら乗ることができるようになった。このように、子どもが見通しをもちやすい方法で援助し、自分も相手も気持ちよく遊べることに気付くような指導者の関わりを、日々の保育の中で意識することが大切であると分かった。

（自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等）

・友達と楽しく遊ぶ経験を重ねる中で、指導者が友達との関わり方や集団の中での遊び方を繰り返し知らせることで、少しずつ自己コントロールできる力が育まれる。指導者は、子どもの思いを受け止めながら、規範意識を育むことを意識し、機会を捉えて援助や仲立ちをしていくことが必要である。

（自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、言葉による伝え合い等）

・保護者に対しては、「今の時期はまだ自分の気持ちを相手に伝えることが難しく、ぶつかり合いも多い。その中で、相手とどのように折り合いをつけていくかを知っていくことが、人間関係を築いていくうえで大切である」と伝えていきたい。家庭と保育所や幼稚園とで連携を取り、してはいけないことや約束事をどのように子どもに伝えていくかを一緒に考え、共通理解していくことが、規範意識を育む基盤になると考えられる。

（道徳性・規範意識の芽生え等）

今後に向けて

・子どもから出てくる『楽しく遊ぶための工夫や発見』を見逃さず、指導者が具体的に子どもに示すなど、友達と経験したことを遊びに取り入れていきたい。

先生見て！お芋になったよ

～友達と一緒に表現する楽しさを味わう中で、人と関わる力を育む～

＜これまでの取組＞

虫探しが好きで、友達と一緒に見つけたチョウの卵を育て、アオムシを大切に扱ったり、成長を喜んだりしてきた。虫をきっかけに、絵本や図鑑にも興味や関心が広がり、手に取る姿も見られるようになってきた。

地域の畑で芋掘りをすることが決まってからは、サツマイモについての絵本を見たり、話をしたりして、活動への期待がもてるようにしていった。

＜本活動のねらい＞

・経験したことを存分にかくことで満足感を感じ、友達と楽しさを共有する。

＜本活動での教育的意図＞

・子どもの「かきたい」という気持ちを受け止め、心地よさが感じられるようにする。
・共に体験してきたことを、友達と一緒に表現することが“楽しい”と感じられるように、また、その気持ちを共有できるように、指導者が仲立ちとなり、意欲的に活動できるようにする。

子どもと指導者の姿　指 - 指導者　子 - 子ども 幼児期の終わりまでに育って欲しい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○芋掘りの翌日 指　「昨日のお芋掘りでどんなことがあった？」 子　「虫おったー」「お芋いっぱい掘った」 指　「そうだね。みんなの大好きな虫もいたし、お芋もたくさんあったよね。今から、昨日のお芋掘りで掘ったサツマイモをかきたいと思います」 子　「やったー！お芋食べたい！」「かいたお芋食べる！！」「葉っぱもかく！」 言葉による伝え合い、豊かな感性と表現、思考力の芽生え等 指　「今日はね、これを使ってかこうと思うんだけど」と言いながら、あらかじめ準備していた袋の中から絵筆を取り出して見せる。 子　「やったー！新しいやつ（絵筆）だ！」と大喜びする。 指　「いろいろな形のお芋の絵がかけるように、太い筆や細い筆と広い畑（紙を見せる）を用意したよ」 子　「大きいのとか、ちっちゃいのとかいっぱいあったもんね」 思考力の芽生え、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等	知 指導者の話に興味がもてるように、また、昨日の楽しかった経験を思い出せるように伝え方を工夫する。 徳 子ども一人ひとりのいろいろな思いや表現をしっかり受け止め、安心して自分の思いを表現できる雰囲気をつくる。

○子どもたちも手伝いながら床一面に紙を貼っていく。 自立心、協同性、思考力の芽生え等 子 「昨日の畑みたいに大きいな」「お芋の絵をかくぞ～」「（本物の）お芋みたい」「こんな紫（のお芋や～）」「オレンジ色のお芋もある！」 自然との関わり・生命尊重等	知 子どもと一緒にいろいろな素材の紙を床一面に敷き詰めることで、広い畑をイメージできるようにする。 徳 自分の思いや考えを十分に表現できるように、楽しい雰囲気の中で、子どもの思いをしっかり受け止め、引き出していく。
○始めは絵筆を使ってかいていたが、そのうち、かいた絵の上を手でぬたくり始める。 子 「お芋になった！」と絵の具がついた手足を見せ合い、微笑み合う。 豊かな感性と表現等	徳 安心して思い切り表現できるような環境を工夫するとともに、指導者と一緒に準備する中で、自分で貼る場所を考えたり、友達と協力したりできるようにしていく。
○紙に隣同士にかかれていた２個のサツマイモを指導者が見つける。 指 「ちっちゃいお芋と大きいお芋が仲良くしてるね～」 子 「へんなお芋になってる～」 指 「雪だるまの形みたいだね」 子 「ほんまや。こっちのは『さつまのおいも』みたいに、でっかいよ」「これ、ヘビみたいに細いよ」 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、豊かな感性と表現等 指 「大きいのや小さいの、細長いのや、太いの、いろいろな形のサツマイモがあったね。こっちの畑（紙）にはどんなサツマイモがあるかな」 子 模造紙の空白を見つけ、かき始める。 自立心、協同性、豊かな感性と表現等 指 「見て見て～。こっちの畑にはおいしそうなサツマイモがたくさんあるよ」と言いながら床から模造紙を外して子どもたちに見せる。	知 子どもが表現した様々な形を正しい言葉に置き換え、形の違いや名称に気付けるようにする。 徳 もっと表現したい、かきたいという気持ちが高まるように、一人ひとりの思いを聞き、かいたものを認めていく。 徳 みんなで完成を喜び合えるよう、かいたお芋の絵をみんなで見る機会をつくり、子どもの表現したものを、指導者が言葉を添えて認めることで、安心感と次への意欲がもてるようにする。
○部屋中の床が絵の具で汚れていることに気付く。 指 「ここ、なんか大変！お昼ご飯食べるから、綺麗にするね」と言いながら雑巾とバケツを準備し始める。 子 「わたしも お掃除するー！」「ぼくもー」 子どもたちが指導者の姿を見て、雑巾を探そうとする。 自立心、協同性等 指 「大変！ここ取れへん!!」 子 「消えたー!!」「取れた！！」「頑張るぞー!!」 道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり等 指 「手伝ってくれるの。ありがとう。みんなで頑張ろうね!!（床を見て）「きれいになってきてるね」 「先生の雑巾は、こんなふうになってるよ」と汚れた雑巾を見せる。 子 雑巾を見せ合い、もっともっと拭き取ろうと、しばらくみんなで雑巾がけに夢中になる。 自立心、協同性、健康な心と体、社会生活との関わり等	知・徳 生活に見通しがもてるように言葉をかけ、協同の場所をもとに戻すことの大切さに気付けるようにする。 徳・体 指導者が率先して雑巾がけをしていき、子どもたちが、自分も手伝おうという気持ちがもてるように導いていく。 徳・体 みんなで力を合わせたので、早くきれいな床になったことを知らせ、満足感や充実感がもてるようにする。

【考察】

・前日に芋掘りの経験をしたことや保育室全体を畑に見立てられるように、いろいろな素材の紙を床一面に貼ったことで、サツマイモをかくというイメージをもち「かきたい！」という気持ちにつながった。また、子どもたちがその気持ちを共感できたことで「友達と一緒にサツマイモをかく活動」が楽しいものになったのではないかと思う。 **（健康な心と体、豊かな感性と表現等）**

・指導者は、一人ひとりが表現した絵や言葉をしっかりと受け止め、共感したことが、一人ひとりの気持ちを満足させ、このことを周りにも気付かせる指導者の関わり方が、子ども同士の関係を深めるための仲立ちになると考える。 **（健康な心と体、自立心、社会生活との関わり等）**

今後に向けて

・友達との違いやよさに気付き、互いに認め合えるように、指導者が仲立ちとなり友達と一緒に活動する機会をもつ。

3歳児 ＜ 知 Ⅴ期・2月　創造 ＞

飛行機できた！見て、見て

～身近な素材に興味や関心をもち、つくることを楽しむ～

＜これまでの取組＞

自宅から持ってくる素材を「お宝」と呼び、素材を使った遊びがクラスの遊びの一つとなり、継続している。初めは、素材を接着することを楽しんでいたが、次第に素材を生かした形や色合いなどを考えて接着したり、つくったもので遊んだりすることを楽しみ、友達同士で見せ合ったり、真似てつくったりする姿が見られた。

＜本活動のねらい＞

・いろいろな素材に触れ、工夫しながらかいたりつくったりして表現することを楽しむ。

＜本活動での教育的意図＞

・いろいろな素材に存分に触れ、興味や関心がもてるようにする。
・イメージしたことをかいたりつくったりして表現できるようにする。

子どもと指導者の姿　指 - 指導者　子 - 子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
A 児 素材を持って登園する。 B 児 「Aちゃんが、お宝を持って来てくれたよー」と指導者や友達に伝える。 自立心、社会生活との関わり、言葉による伝え合い等 指 「何を持ってきてくれたのかな」 A 児 「いっぱい箱を集めてきたよ。Cくん、この箱好き？」 C 児 「うん、好き」 A 児 「どうぞ」　社会生活との関わり、協同性等 指 「Aちゃん、その箱をCくんにあげるんだね。Cくん、よかったね、嬉しいね」 子 素材を興味深く見る。 D 児 「Dはこの箱使いたい。この棒みたいなのもいる。これでつくりたいな」　思考力の芽生え、豊かな感性と表現等 指 「何をつくろうと思ってるの？何ができるか楽しみだね」 D 児 朝の用意を早く終え、素材遊びの準備をする。はさみを使ってティッシュの箱にラップの芯や牛乳パックを貼って、イメージする形をつくり、絵をかいたり飾りを付けたりする。	知 素材で遊ぶことを楽しみにしている思いに共感し、素材に興味や関心をもち、遊びへの意欲を高める。 徳 友達の優しさに気付き、喜びを感じられるように言葉をかける。 知 身近な素材に興味や関心、遊びへの意欲を受け止めることで、自分の思いを表現する楽しさが十分に味わえるようにする。

指 「はさみの使い方、大丈夫？」 D 児「うん。できた！飛行機にみんなが乗っているよ。ここの棒みたいなの（ラップの芯）を持ったら、こうして動かせる。ピンクのキラキラ見つけたから付けたよ。きれいでしょ、ほら見て」 思考力の芽生え、豊かな感性と表現等 指 「すごい！先生にも持たせて。素敵な翼を考えたね」 C 児「D くん、すごいな」 指 「ほんとだね、すごいね」 子 D 児のつくった飛行機を見ようと、子どもたちが集まって来る。 E 児「E も同じのをつくりたい」 D 児「一緒につくろう！D の飛行機はここに置いて飾っておくよ」 自立心、協同性、健康な心と体等 ○E 児は笑顔で D 児と一緒につくり始める。	徳安全なハサミの使い方を確認することで、用具を正しく安全に使う意識が高まるようにする。 知一人ひとりがつくっている様子を認め見守りながら、子どもが自分なりのイメージをもっていることや表現したい気持ちを育む。 知子どもの表現を具体的に認めることで、達成感や充実感が十分に味わえるようにする。 徳友達のよさに気付く、よさを認める、友達の思いに寄り添えるようにする。 徳友達と関わりながらつくることを楽しめるよう、環境を整え、見守る。

【考察】

・いろいろな素材に触れながら接着させて遊ぶ経験を積み重ねてきたことで、素材を見て「○○つくりたい」「○○できる」という思いをもって取り組むようになってきた。今後も継続して取り組めるように、素材や環境を準備しておく必要がある。

（思考力の芽生え、豊かな感性と表現、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等）

・つくったものを指導者や友達に認めてもらうことで、心を動かしながらかいたりつくったりすることを楽しめる心が育った。

（自立心、社会生活との関わり、思考力の芽生え、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現等）

今後に向けて

・イメージを膨らませ、遊びに必要なものを考えてつくったり、つくったものを使って遊んだりすることを友達と一緒に楽しんでいきたい。

3歳児 ＜ 徳 Ⅴ期・3月　人と関わる力 ＞

お相撲ごっこ、応援したのがおもしろかった

～安心して遊び、自分の思いを素直に出す～

＜これまでの取組＞

園の近くに相撲部屋があり、力士を見たことがある４・５歳児クラスの子どもたちは、普段から『お相撲ごっこ』をして遊んでいる。その様子を子どもたちは、興味津々に見ていたこともあり、運動会ではお相撲体操をした。また、３月場所で巡業に訪れている力士を実際に見ることができたことで、より身近に『相撲』を感じている。

＜本活動のねらい＞

・指導者や友達と一緒に『お相撲ごっこ』を楽しむ。
・安心して遊び、自分の思いを素直に出す。

＜本活動での教育的意図＞

・気持ちを受け止めながら、自分の思いや考えを自分なりに表現できるようにする。

子どもと指導者の姿　指 - 指導者　子 - 子ども 幼児期の終わりまでに育って欲しい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○運動会で経験した『お相撲体操』で体を動かした後 指「元気いっぱいだね。そうだ！一緒にお相撲ごっこしない？」 A 児「やろう、やろう」　言葉による伝え合い等 B 児「前、ほしぐみ（4歳児）さんがやってた」 指「そうだね。はなぐみ（3歳児）さんもやってみようか」	体 体を動かして遊びたい思いを継続できるような投げかけをする。 徳 4歳児に憧れがもてるように伝える。
○指導者が園庭に円をかき、相撲ごっこが始まる。 A 児「先生と勝負する！」　健康な心と体、自立心等 指「いいよ！はっけよーい、のこった」「先生の勝ちー！」 次々に遊び始める。	体 伸び伸び体を動かして遊ぶ楽しさを味わえるような場を整える。
B 児遊びの列には並ばず、土俵の外から黙って見ていた。 指「Bちゃん、一緒にやってみない？」 B 児「Bは見とくわ」 指「そう。じゃあ、先生はAくんたちと遊んでくるね」 B 児「うん」 指遊びながらもB児の様子を見守る。 B 児笑ったり険しくなったり、表情豊かに見ている。 協同性、社会生活との関わり等	徳 指導者が仲立ちとなって友達を誘い、一緒に遊ぶ楽しさを感じられるようにする。 徳 B児の表情から気持ちをくみ取り見ていることも参加と捉え、B児なりに安心感と遊びへの興味や友達への関心を持続できるように支える。
○しばらくしてから 指「じゃあ、先生もBちゃんと一緒に見て、友だちを応援しよう」「頑張れー！負けるなー！」	

B　児「Aちゃん、めっちゃ強いで。負けたのに泣いてないな」 言葉による伝え合い、道徳性・規範意識の芽生え等 指　「ほんとだね」「強かったね」「すごーい！」 B　児遊びを見て感じたことや気付いたことを次々と指導者に伝えようとし、大きな声で指導者と一緒に応援するようになった。　協同性、言葉による伝え合い等 ○降園前 指　「今日は、どんなことがあったかな？楽しかったことや思ったことをみんなに話してくれるかな？」 B　児手を挙げている。　自立心等 「お相撲ごっこが楽しかった」　言葉による伝え合い等 指　「どんなところが楽しかったのかな」 B　児「応援したのが面白かった」 指　「先生もBちゃんと一緒に応援して楽しかったよ。また、一緒に遊ぼうね」 B　児嬉しそうな表情で自分の席へ戻る。 指　「今度、ほしぐみさんとお相撲ごっこをやってみようか？」 子　「やりたい！やりたい！」 指　「ほしぐみさん、強いからなー」 A　児「ぼく、ほしぐみさんに負けへんで」 B　児「うん」と言いながらうなずく。 指　「そうだね。みんなもうすぐ、ほしぐみさんだもんね」	知安心して自分の思いを出せるように、子どもの気持ちや表現しようとしている姿を受け止め、言葉に表せるようにする。 知・徳指導者との会話を繰り返し楽しみながら、友達との気持ちの通じ合いや言葉のやり取りにつなげていく。 知思ったことを友達に伝えたり、相手の思いを聞いたりできるように、見守ったり、助言したりする。 徳自分の思いや考えを自分なりに表現できるように気持ちを受け止め、それが相手に伝わるように仲立ちをする。 徳子どもの気持ちを具体的な言葉に置きかえることで、進級することに期待がもてるようにする。

【考察】

・指導者が意欲的に遊べるような遊びを取り上げたり、一緒に遊んだりすることで、子どもたちが遊びに興味をもち、進んで活動しようとする意欲につながった。　**（健康な心と体、自立心等）**

・B児は友達が遊びを楽しんでいる姿を見て、『お相撲ごっこ』の楽しい雰囲気を感じとり、そのことが新しい遊びや友達に興味や関心をもつ要因になったと考える。　**（協同性、社会生活との関わり等）**

・指導者がB児の隣に座って一緒に応援することで、B児は安心感をもち、遊びや友達の様子に対する興味や関心が持続し、自分の思いを表現することに結びついたと考える。また、指導者は、B児の表情やしぐさから気持ちをくみ取り、B児が自分の思いを表出する姿を見守り、受け止めたり、共感したり、思いを伝える機会をつくったりすることを繰り返すことで、子どもがいきいきと表現できるようになり、この積み重ねが、やがて自己肯定感の育ちにつながると考える。

（自立心、協同性、社会生活との関わり、言葉による伝え合い等）

今後に向けて

・指導者との信頼関係や安心感といった支えをもとに、自分が興味をもった遊びを存分に遊ぶ中で、気付きや思いを友達と伝え合う楽しさを知らせていきたい。